

ヒマワリの花をさんびんをあしらった弁護士
バッチ「金持ったけど、はげちゃった」



「普段は資料作りなどパソコンと向き合うことが多い」と多田元弁護士



天井まで届きそうな本棚には、今まで関わった事件の資料や判例が並ぶ

記者たちには、刑は重ければいいのではなく、反省できるようサポートする弁護士を新たにしました。

取組行ってみよう

休みなく、ボランティアとしても働く多田さんの話を聞いた中学生記者。横山さんは「大変なこともあるけれど、達成感のある仕事だと思いました」。岸君は「事件を起こした人の心を開かせて話することは、難しいと思う。そこにやりがいを感じているのではないかと考えました」。

記者たちには、刑は重ければいいのではなく、反省できるようサポートする弁護士を新たにしました。

面会重ね 立ち直り支え

問題が起こったとき、法律を使い、問題の解決を図るのが弁護士です。中学生記者が取材したのは、子どもに関わる事件を数多く手掛けている多田元弁護士(67)。仕事の内容からやりがいまで聞いてきました。

弁護士

名古屋千種区の事務所の中心は、所狭しと並んだ本棚にファイルや法律の分野の専門書、不登校や虐待などの本がぎっしり。「子どもの人権をテーマに仕事をしてきました」と多田さん。

仕事の中心は弁護です。刑事裁判の場合、罪を犯した人の立場で意見を述べ、裁判所に証拠を提出します。民事裁判では「医療事故など被害者側に立つことが多いです」。

家庭裁判所が処分を決める少年事件は「多いと一年に三十件くらい担当します。人命が奪われた少年事件もありました」。罪を犯した子の付添人になり、面会を重ねて原



少年事件を年30件

因や問題を明らかにし、立ち直りに必要なことを考えます。「時には聞いたことを親



多田さん(手前右)から法律の話を聞く中学生記者たち。いずれも名古屋市千種区の本多田法律事務所

にも秘密にして、本当の気持ちを書くよう気を付けます」その子の背景にある生い立

子の味方を目指す

スケジュールは朝から夜まで、週末も予定がいっぱい。日中は裁判のほか、弁護士会、児童相談所などで協議や相談が続く。夜はパソコンで裁判の資料作り。担当した子どもは家庭に恵まれないことが多く、「ずっと関わる存在が必要」と支え続けています。「裁判官時代に出会った少年とは三十六年文通しています」。取材中も携帯電話が鳴り「ご飯食べてるの?」と会話が始まりました。

「子どもの味方になる弁護士になりたい」と思ってきたと話し、子ども本人からの相談は無料で応じています。「やりがいを感じる」ときは「と聞かれ「子どもの親や裁判所が僕に敵しいことを言ってきたり、子どもから「ありがとう」と言ってもらえたとき」と話してくれました。

「子どもの味方になる弁護士になりたい」と思ってきたと話し、子ども本人からの相談は無料で応じています。「やりがいを感じる」ときは「と聞かれ「子どもの親や裁判所が僕に敵しいことを言ってきたり、子どもから「ありがとう」と言ってもらえたとき」と話してくれました。

夢みるみんなへ

弁護士・多田さんから

弁護士になるには法科大学院を出るなどして司法試験に合格した後、司法修習を受けます。僕は2回目の

司法試験で合格しました。弁護士は人と人のトラブルを扱う仕事なので相手の言い分を的確に聞き取るコミ

ュニケーション能力を磨く必要があります。また人を大切にする気持ちを持った人が向いています。たくさ

んの事件を抱えると時間のやりくりが大変。僕はボランティアで担当している仕事もたくさんあります。